

※本研究は、千葉大学アカデミック・リンク・センターの「教育関係共同利用拠点(教職員の組織的な研修等の共同利用拠点《教育・学修支援専門職養成》)」としての活動の一部である。



教育・学修支援の専門性を備えた人材を養成するSDプログラムの試み

—千葉大学「アカデミック・リンク・教育学修支援専門職養成プログラム」試行コースの実施—

- 御手洗 明佳（千葉大学）・白川 優治（千葉大学）・岡田 聰志（千葉大学）・
藤本 茂雄（千葉大学・非会員）・小野 永貴（千葉大学 *1・非会員）・
池田 光雪（千葉大学・非会員）・山中 弘美（千葉大学 *2・非会員）・
三角 太郎（千葉大学 *3・非会員）・塙田 知也（千葉大学・非会員）・
小林 裕太（千葉大学・非会員）・西原 朝子（千葉大学・非会員）・
竹内 比呂也（千葉大学）

* 発表申請時点の所属、*1 現・日本大学、*2 現・高エネルギー加速器研究機構、
*3 現・筑波大学



1. 目的

「教育・学修支援の専門性を備えた人材を養成するSDプログラム」について、試行コース実施から、受講生のSDプログラムに対するニーズや課題を整理し、「教育・学修支援の資質・能力」を育成する教育方法について検討すること。

0. 目次

1. 目的
2. 背景と調査対象
3. 分析枠組みと検討課題
4. 対象コースと調査概要
5. 調査結果
 1. 教育のICT化と教材開発
 2. 学生・学修に対する理解
 3. 教育方法・教育評価
6. 考察とまとめ
7. 今後の課題



2. 背景と調査対象

■大学教育改革

- 大学教育の質的転換(中央教育審議会2012)
- 大学設置基準等の改正による「SDの義務化」
- 職員の職能開発の必要性

■職員の能力開発に関する議論

- 職員の職務に関わる資質・能力や専門性の調査(上西他 2008, 林 2006, 中井2014)

■大学における「教育・学修支援」に求められる専門性に関する議論

- 学務系職員のための専門能力分野(ACPA & NASPA, 2015)
- 「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目」(竹内他 2016, 岡田他 2016)

➤ どのように能力を育成していくことができるのか。

アカデミック・リンク教育・学修支援専門職養成履修証明プログラム

- 教育関係共同利用拠点(教職員の組織的な研修等の共同利用拠点《教育・学修支援専門職養成》)としての取組み
- 教育・学修支援に特化した履修証明プログラム
- 職員・教員・その他社会人を対象
- 能力ルーブリック※に基づいた段階的・体系的な研修プログラム

履修証明制度とは

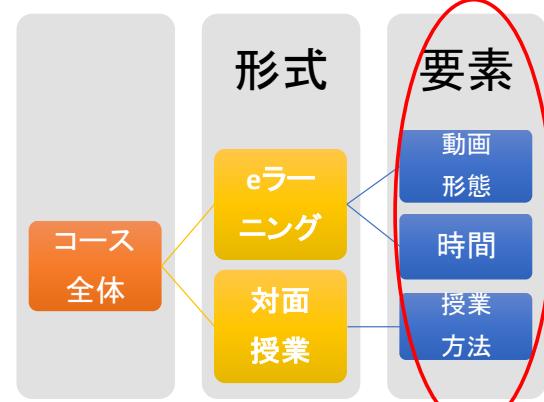
学校教育法第105条及び学校教育法施行規則第164条の規定に基づき、大学が積極的な社会貢献として、主に社会人向けに学習プログラムを開設し、その修了者に対して、法に基づく履修証明書を交付するもの。

*「教育・学修支援の専門性に必要な能力項目」、「教育・学修支援の専門性に必要な能力ルーブリック」については、岡田他(2016)を参照。

3. 分析枠組みと検討課題

基盤的コースの共通要素

- 全体で約8時間のコース設計 ■eラーニングと対面授業の実施



検討課題: どのような形式・要素が効果的なのか。

ALPS履修証明制度「リキュラム・マップ」
平成28年に一部コースを試行的に実施

	プログラム15テーマ														
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
各コースが、ループリックの各領域のS-A・B・Cの段階のどこに対応するかを示したもの	高等教育政策と自校運営 カリキュラム解説	カウンセリングの基礎 学生の抱える問題 国際化対応 分析と活用 教育のICT化と教材開発支援 教育のICT化と教材開発支援 アバイング 学生に対する理解 ラーニングモード 教育・学修支援 マネジメント(2) マネジメント(3) 教育・学修支援 プロジェクト研究 プロジェクト実習	C	B	C	C	B	B	B	B	B	C	B	A	A
①学生・学修・教育支援の内容	教育内容の把握 学生・学修・教育支援の内容の設計と実施 学生・学修・教育支援活動のプログラム改善 学生・学生支援の現状理解	-	-	C	-	-	B	C	-	-	C	-	C	B	A
②担当業務の内容	課題の設定と問題解決 情報収集・整理・分析・発信 業務に関する知識 様々な経験との活用	C	B	-	-	C	C	B	C	B	C	-	C	B	A
③大学についての知識	高等教育・社会・教育に関する知識 所属大学についての理解	-	C	B	B	B	-	-	B	-	B	B	C	B	A
④学生への対応	学生対応への基本的姿勢・態度 留学生への対応 困難を抱えた学生への対応	-	C	B	B	B	-	-	B	-	B	B	C	B	A
⑤担当業務への取り組み方	担当業務の遂行 チームワーク	-	-	C	B	-	-	-	C	-	C	C	C	B	A

目的: 試行の実施から得られた「受講生のニーズ」や「課題」を今後のプログラム運営に活かすこと。

4. 対象コースと調査概要

対象コース:

- 平成28年度に試行的に実施した3コース。
 1. 教育のICT化と教材開発支援(8~9月実施)
 2. 学生・学修に対する理解(2~3月実施)
 3. 教育方法・教育評価(2~3月実施)

調査方法:

- ①各コースにおいて様々な方法を適用する
- ②コースを修了した受講生へのアンケート調査
 1. 教育のICT化と教材開発(アンケート1)
 2. 学生・学修に対する理解(アンケート2)
 3. 教育方法・教育評価(アンケート2)

教育のICT化と教材開発

申込期間: 2016年7月22日～8月28日

eラーニング視聴期間: 2016年8月19日～9月8日

対面授業実施日: 2016年9月9日

登録者: 30名, **修了者:** 25名

アンケート1: (Moodleのアンケート機能を使用)

実施期間: 2016年9月16日～9月30日(15日間)

回答者数: 14名, **回収率:** 56.0%

主な質問項目: 動画教材の使用感、受講コースの満足度、コース実施日程・受講料・会場について等。

9

コース開発の組み合わせ比較表

	教育のICT化	学生・学修支援	教育方法・評価
【eラーニング】動画形態	講義形式(スタジオ) 	講義形式(教室) 	教材形式(対談)
【eラーニング】時間	短い 	長い 	短い
【対面授業】授業方法	基礎習得－体験形式 	講義型－知識習得形式 	事前学習－協同学習形式

11

学生・学修に対する理解/教育方法・教育評価

申し込み期間: 2017年1月16日～1月27日

eラーニング視聴期間: 2017年2月9日～3月8日

対面授業実施日: 2017年3月9日～10日

コース登録者(学生・学修): 59名, **修了者:** 50名

コース登録者(方法・評価): 35名, **修了者:** 27名

アンケート2: (Moodleのアンケート機能を使用)

実施期間: 2017年3月10日～3月31日(21日間)

回答者数: 46名(全54名), **回収率:** 88.9%

主な質問項目: 受講理由、受講する際に期待したもの、受講して得られた成果、コースへの満足度、受講生の基本属性。

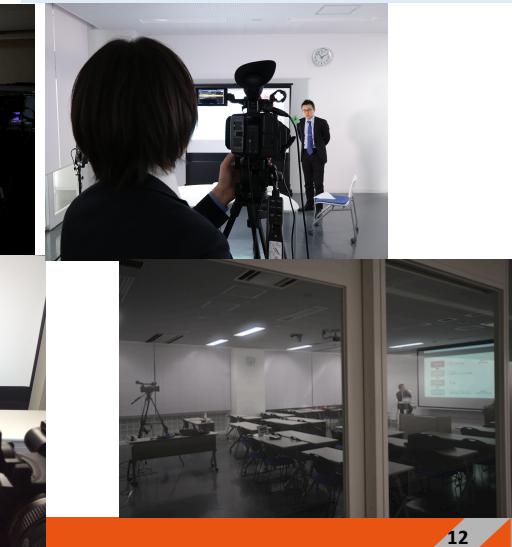
10

【eラーニング】動画形態－コンテンツ開発のプロセス

講義型(スタジオ)の撮影プロセス



【講義型(教室)と対談形式の撮影プロセス



12



5. 調査結果

13

5-2. 学生・学修に対する理解(講義型-知識習得形式)

Q. コース全体の満足度=88.1%(とても満足+満足、以下同様。)



Q. eラーニング及び対面授業への満足度=81.0%(eラーニング)、69.0%(対面授業)



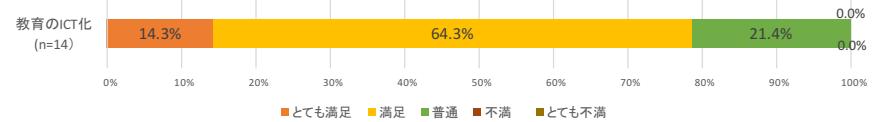
→eラーニングコンテンツの「時間の長さ」が、「eラーニングへの満足度」に影響を与える可能性は低い。

→□受講理由「eラーニングへの興味があった」項目と「eラーニングへの満足度」項目に正の相関が確認された($p < .05$)

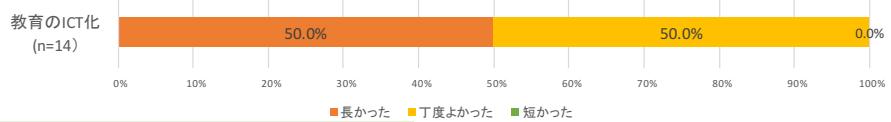
15

5-1. 教育のICT化と教材開発支援(基礎習得-体験形式)

Q. コース全体の満足度=78.6%(とても満足+満足)



Q. eラーニングの「時間」にへ対する意識 長かった=50.0%



<eラーニングに対して挙げられた意見>

- スタジオ撮影の動画を視聴するのがこんなに疲れるとは思わなかった。講義自体は分かりやすかったので、授業をそのまま視聴できるほうが良いと思う。
- 放送大学形式は、見るのが辛かったです。動画をBGMに配布スライドを通読していました。
- 動画のインデックスが欲しかった。

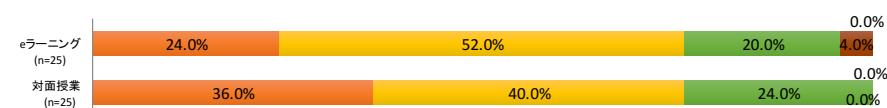
- eラーニングの時間が相対的に短かったのに対し、時間が「長い」という回答が多かった。
- 広範囲な要望に対応出来る環境準備の必要性。

5-3. 教育方法・教育評価(事前学習-協同学習形式)

Q. コース全体の満足度=92.0%(とても満足+満足、以下同様。)



Q. eラーニング及び対面授業への満足度=76.0%(eラーニング)、76.0%(対面授業)



比較

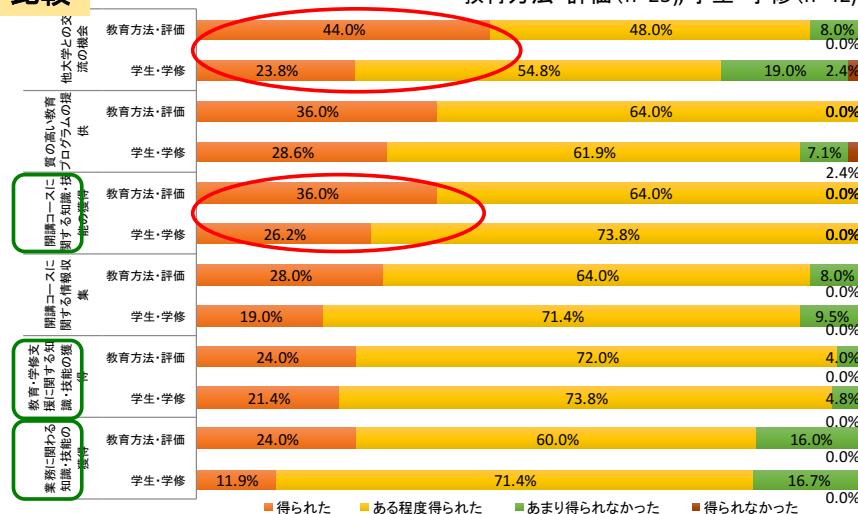
Q. コースの受講によって得られた成果:「他大学との交流の機会」



16

アンケート2: コースを受講して得られた成果

比較

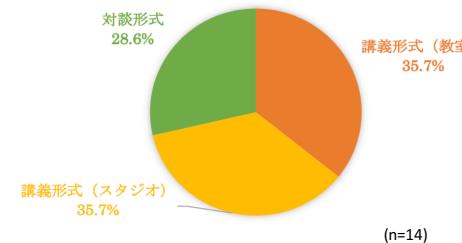


知識・技能の獲得(得られた+ある程度得られた) 80~100%獲得

6. 考察とまとめ(1)

1. eラーニング<動画開発>

Q. eラーニングの授業形態についてどの形式が望ましいと思いますか。(アンケート1より)



- ◆ eラーニング形態に関する特別なニーズは確認されなかった。
- ◆ eラーニング形態が「知識・技能の獲得」に影響を及ぼすことは確認されなかった。

6. 考察とまとめ(2)

2. eラーニング<時間>

- eラーニングの教材の時間の長さが学習者の満足度やコース修了時の成果に影響を及ぼすことは確認されなかった。
- eラーニングに対するニーズは、動画視聴機能の改善(早送り・インデックス・流しっぱなし・繰り返し再生等)の提供や、動画で使用した資料(講義スライド)の掲載であった。

3. 対面授業の方法

- 授業方法が、「知識・技能の獲得」に影響を及ぼすという点は確認できなかった。
- 一方、「受動的な授業形態」よりも「能動的な授業形態」の方が、受講コースの成果を「得られた」と評価する傾向が見られる。
- 協同学習の方法を取り入れたコースでは、そうではないコースより「他大学との交流の機会」が「得られた」と評価する傾向が確認された。

7. 今後の課題

◆2年間のプログラム全体の成果検証

- ・履修者として
- ・プログラムとして

◆履修証明プログラムとしてのBlended learningの課題と可能性

- ・受講生の参加制約への配慮
 - eラーニングへの関心高い
 - 参加のしやすい対面授業の設計
- ・プログラム全体としての最適配置



参考文献

- ACPA & NASPA.(2015).Professional Competency Area for Student Affairs Educators, (http://www.naspa.org/images/uploads/main/ACPA_NASPA_Professional_Competencies_.pdf) (2017年6月10日最終閲覧)
- 林一夫(2008)「大学職員の今後のあり方・役割、取得すべき能力や知識技術—教務系職員を中心として」『大学教育学会誌』28(2),101-107.
- 中央教育審議会(2012)『新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて—生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ—(答申)』(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1325047.htm)(2017年6月3日アクセス)
- 中井俊樹(2014)「教学マネジメントにおける大学職員の役割」『高等教育研究』17,95-112.
- 岡田聰志・白川優治・米田奈穂・谷奈穂・御手洗明佳・多田伸生・奥田聰子・竹内比呂也(2016)「教育・学修支援に求められる大学職員の資質・能力と専門性に関する探究的研究」『大学教育学会誌』第38巻2号, 47-56.
- 竹内比呂也・白川優治・山崎千鶴・井上真琴(2016)「これからの中大における教育・学修支援の専門性」、『大学教育学会誌』第38巻2号, 99-103.
- 上西浩司・中井俊樹・齋藤芳子(2008)「教務部門が求める教務担当職員像—教務部門事務責任者への全国調査結果」『大学行政管理学会誌』12,179-186.